

ある江戸人の異文化理解(三)

Crossing Cultures in the *Edo* Era.さばたんさい 佐羽淡齋(一七七二～一八二五)の そうぎろう 総宜楼の詩碑をめぐってAn Examination of *Sougiro*, a poem written in classical Chinese by Tansai Saba (1772~1825)

新谷 雅樹

SHINYA Masaki

—

「世の中には、家の中にじっとしてられる人間と、家の中にじっとしてられない人間の二種類がある」

これはラディアード・キプリングの有名なアフォリズムである。かりに世の中に前者と後者のタイプがいるとして、では、どちらに興味をひかれるかというところ——キプリングも付言したように——もちろん後者のほうに、わたしの食指はうごく。というのも、江戸の人びとには、この「家の中にじっとしてられない」タイプの人間がじつに多かったからである。近来、江戸人に親炙しているわたしは、当時の随筆、雑記のたぐいをよく拾い読みするが、江戸の人びとは時にふれ折につけ、遊意がうごく遠出をする、という行動様式をもっていたように見受けられる。四季おりおりに花思月情をもとめてやまない風流心が、人びとを家にじっとしておかなかったようなのである。こういう人びとの行楽への衝動こそ、江戸文化の裾野を大きくひろげた原動力だったのではあるまいか？ 渡辺京二氏などの著作¹を読むと、その感をいなめないの

「読万卷書、行万里路。万卷の書を読み、万里の路を行く。」²

これは明の画家・董其昌とうきしやうのアフォリズムであるが、文人の美的生活において、「読書」とともに「行路」の必要性を説いて、こういう気宇壮大な対句を吐いている。

この箴言は、敷衍して解釈すると、こうである——文人たるもの、ふだんから詩囊や画囊をこやしておかなければならない。そのためには、腹笥ふくし万卷の学養に富むばかりではなく、胸中に丘壑きゆうがくをもたくわえておくべきである。

では、丘壑を胸中にたくわえるにはどうすべきか？ そうするには「済勝之具せいしょうのぐ」をもって名山勝水を遊覧しなければならない。

では、「勝すぐれたるけしきを済る具わた」とは具体的になにを指すか？ それは実地に跋山涉水する、われとわが脚の謂いにほかならない。こうして胸中にたくわられた万里の江山は、おのずと筆下に生じて、それが詩となり、画となるだろう。

ところで「幕末の三舟」の一人に、山岡鉄舟という男がいた。この男、剣も一流なら書も一流で、「読万

巻書、行万里路」を座右の銘にしていたという。しかし、この「万里の路を行く」という大陸的誇張が、けっして誇張にはならぬほどの鉄脚の持ち主であった。なんでも江戸から成田山まで一日で歩き切ったと聞く。自動車や汽車のない時代、江戸からの新勝寺参詣客は、ふつう船橋あたりで一泊するのがならわしであった。こころみに Google Maps によって調べてみると、東京駅から成田山新勝寺までは約六十五キロの道のりで、国道 296 号線を歩きづめで十三時間二十一分もかかる。しかし、わが鉄舟は二本差しという重い腰の物をおび、舗装されていない街道をすたすと歩きとおして、なお余力があったというのである。

徳川のむかし、このように驚嘆すべき「済勝の具」の持ち主は、なにも鉄舟一人にかぎったことではない、貴賤上下をとわず、すくなからずいたのである。たとえば、清水徳川家の御広敷用人・村尾嘉陵などは、「天保二年七十二歳の時、八八幡詣とて、薄明から午後六時までかかって十五里つまり六十キロを歩き通した。……七十翁でありながら時速五キロが維持できた」³という。

ことのついでに言うと、二宮金治郎は十二文の大足袋をはいて、一日八十キロも歩いたという伝説があるが、かりにこれが口碑にすぎないにしても、戦前までは一般に信じられていた言い伝えである。「駕籠に乗っては、土は分かるものではない」これが農家者流・尊徳の信条であった。

いや、男だけではない、女もすごい。篠田敏造の『幕末明治女百物語』⁴によると、「昔の女は八十八ヶ所の、お大師さん参りが一番楽しみで…〈略〉…その頃のお詣りは、一日十二里と極まっていました。女の脚では凄いです、御信心と大勢のお連れで、スタスタ歩けば歩けるもんでした」という。しかも下駄ばきで歩きづめに歩いたというのだから、脱帽にあたいする。

二

おしなべていうと、文化文政期は太平の世を謳歌し、文化が爛熟した時代であった。この化政期の特徴の一つは、交通の四通八達によって旧時よりも移動の自由と安全が保障されたために、上下一般に行楽が好まれたということである。人びとは四季おりおりに各所の郊外に出遊しては、花に酔い月に眠って一両日の歓をつくす——これが一般的風潮だった。

漢詩の世界では、これを「郊行」ともいい、「郊遊」ともいい、「出郊」ともいう。田中道雄氏の『郊外散策の流行』によると、江戸の後期には「郊行漢詩」の盛行が見られたという⁵。

たとえば、『剣南詩稿』(陆游)や『石湖詩集』(范成大)や『江湖集』(楊万里)などに、いうところの「郊行漢詩」をしばしば見かける。化政期の漢詩人は南宋三大家の陸、范、楊の詩をことのほか重んじたから、この「郊行漢詩」の流行には、三大家の影響が強く働いたと見ることができる⁶。ちょうど唐詩にかわって宋詩が鼓吹されていた時期で、とりわけ范成大的『四時田園雜興』六十首⁷は広く読まれて、江戸の漢詩人たちの田園に対する憧憬をかきたてた。

周知のように、かつて中国の都市は城壁をもったが、日本の都市は城壁をもたなかった。言いかえると、中国は都市と農村の間に明確な境界をもうけたが⁸、日本は都市と農村の間に境界をもうけず、むしろ都市のなかに農村を包摂していたと見たほうがいい。これは中国には見られない現象であった。このように日中双方の田園には外観上の相違こそあったものの、しかし春耕秋収という農耕のサイクルという

点において、また山川草木に田圃を中心とする村間の光景という点において、さらに実りの秋に催租に心をくたく農民の心情という点において、日中彼我の農村は酷似していた。『四時田園雑興』が徳川後期に広範に読まれたのには、この彼我の農村における同一性に対する、日本人側の一方的な同甘共苦があった。(当時、実際に唐土の田園を見た江戸人は皆無であったにもかかわらず)

ところで、『四時田園雑興』の巻頭には、つぎのような小序が冠せられている⁹。

「淳熙十三年(1186)、重い病がやや癒えて、石湖もとの隠居所にもどってきたので、おりおり野外に出ては囑目の景色を詠じて七言絶句を一首ずつ作ってみたが、春夏秋冬が終わってみると六十首できあがっていた」¹⁰

この連作は本来、「春日」「晩春」「夏日」「秋日」「冬日」の五章にわかれ、各章は十二首の七絶から成る。五章各十二首で、ちょうど六十首。これまた、なんと均斉のとれた別集(個人詩集)であろう。おそらく、このように整序ある田園詩集は世界的にもまれなのではないだろうか? そういう形式美にくわえて、内容美が読む人の心をうつ。病余の詩人が四時朝暮、吟杖をひいて野外に出遊しては、おもに田園の美しさやのどかさを即事即詠する——その一絶、一絶が江戸の漢詩人の詩心を触発したのである。

『四時田園雑興』六十首は、陶淵明、王維らの流れをくむ田園詩の集大成と評されるが、こころみに、そのうちの「春日田園雑興十二絶」其一と「晩春田園雑興十二絶」其三の二首を引いてみよう¹¹。

柳花深巷午鶏声	柳花 深巷 午鶏の声
桑葉尖新緑未成	桑葉は尖 ^{さき} 新 ^{みどり} たにして 緑未だ成らず
坐睡覺来無一事	坐睡より 覚め来りて 一事無く
満窓晴日看蚕生	満窓の晴日 蚕の生まるるを見る

胡蝶双双入菜花	胡蝶 双双 菜花に入り
日長無客到田家	日長くして 客の田家に到る無し
鶏飛過籬犬吠竇	鶏は籬 ^{まがき} を飛び過ぎて 犬は竇 ^{あな} に吠ゆ
知有行商来売茶	知る 行商の来たりて 茶を売るを

なるほど、如上の二首に詠いこまれた平穏無事な農村風景には、日中彼我の相違はいささかも感じられない。少なくとも言語に古典中国語がもちいられているという点をのぞけば、日本の田園と瓜二つの一齣、一齣がここにある。また用字や句法にもむずかしいものはなく、くわえて日本人には作りやすい詩形である七言絶句(四行詩形)ということも手伝って、江戸後期には、このような田園詩の模倣者^{エビゴネン}が簇出した。

たとえば、この連載の主人公である、桐生の豪商にして詩人の、佐波淡斎の七絶を例に引こう。(「田園月夜」『淡斎百絶』所収)¹²

連枷声裏夜方長	連枷 ^{れんか} (から竿)声裏 夜 ^{まさ} 方に長く
秋老村村打稻忙	秋 老 ^ふ けて 村村 稲を打つに忙し

月満平田冷如水 月は平田に満ちて 冷きこと水の如く
寒光結作五更霜 寒光 結びて作る 五更の霜

秋の夜長に、村々は稲の刈打ちに忙しい。刈り入れをおえた平田には冷たい月がのぼり、白い月明かりが田面一面を照らして、まるで未明に霜がおりたような眺めだ。

こういう秋収の一齣は、范成大が囑目し、吟詠したものに等しいものだし、また、この「田園月夜」の詩想は『四時田園雜興』から学んだものとおぼしい。淡齋はおそらく、柏木如亭の序が冠せられた『范石湖田園雜興』(享和三年刊 石湖は范成大の号)や、大窪詩仏・山本緑陰の校を経た『范石湖詩鈔』(文化元年刊)をそらんじ、詩材をもとめて桐生の農村をめぐり歩いたものと思われる(淡齋は如亭、詩仏、緑陰を詩師あるいは詩友として仰いでいた)。その農村を点描した「桐生竹枝」七首(『淡齋百絶』所収)などは、まさに『田園雜興』の和製ミニチュア版だと言っていいほどである。

さらに言えば——地域的な平和のなかでマイナーな詩を作りつづけた、という点において——淡齋詩は南宋後半期の「永嘉の四靈」¹³の四人の詩境や作風に近似する。四靈は中晩唐の姚合や賈島を規範とし、典故を用いない「白描の手法」で、自然や人事を平淡に詠じた。四人の詩は箱庭的な小さな世界を詠うことに終始したため、中国詩史においては軽くあつかわれている群小詩人にすぎないが¹⁴、しかし淡齋たち一派は、四靈の詩に対して、むしろ重きをおいた。おそらく、日本人にまねしやすい平易なスタイルが買われたのだろう。たとえば、淡齋が設立した桐生の詩社・翠屏吟社は、『宋四靈詩鈔』(清・呉之振編)を刊行している¹⁵。文化十二年(1815)のことである。これは淡齋の肝いりで、社友をあげて出版したものであり、同好の実作のお手本に供するためのものだったにちがいない。

淡齋詩も多くは平明な叙情を主として、白描の手法を多用する。これはもう南宋の三大家というよりも、永嘉の四靈の影響と見たほうがいだろう。郷土の桐生に材をとった淡齋詩は、節物風光の情趣にしみじみとしたものがある(まるで永嘉の四靈の詩のように)。

それにしても、四靈の詩が平淡なもので、日本人にはお手頃な手本だったとはいえ、言語をことにする以上、それを模倣するだけでも、相当の苦心は要る。しかし、淡齋はそれを自家薬籠中のものにして、元来、淡齋は地方の富商で業余詩人であったが、稀代の諧謔家・周骨平先生のいう、「田舎在所にて詩語碎金・宋詩語にて模擬する、富家の子弟の詩」¹⁶の域を脱しているのである。その点は多とすべきであろう。

この四靈が活躍した南宋末期は、社会の安定と農工商の発展、それに印刷出版の隆盛といった諸条件にめぐまれて作詩人口が格段に増加した。作詩は市民までもが手をそめるようになって、もはや貴族や士大夫階級の独占物ではなくなったのである。

ちょうど同じような現象が数百年おくれで、江戸の最盛期である文化文政年間にもあらわれた。日本でも、この時代に漢詩の作詩人口が飛躍的に増大したのだが、それには相応の理由があった。

第一にあげなくてはならないのが、当時の識字層がおどろくほど広範であったこと。

第二に、漢詩文こそ文学の王道と考えられていたこと。

第三に、そのことによって漢詩文の知識が民間にまで普及していたこと。

第四に、漢詩文の実作者を糾合する詩社が、全国各地の主だった都市に設立されたこと。

第五に、出版業の隆盛により、自作の漢詩文が少なくとも詞華集に採録される可能性があったこと¹⁷。

たとえば、柏木如亭編の総集『海内才子詩』^{アンソロジー}¹⁸(文政三年刊)に見られるように、大名や武士はもとより、富商、豪農、はては妓女まで漢詩をこしらえたのである。そもそも、編者の如亭からして幕府の小普請方大工棟梁で、微官であった。

こうした作詩人口の無階級化は、当然のことながら、詩材の拡大をもとめずにはおこななかった。

話は前後するが、田沼意次失脚事件のあおりをうけ、昌平黻の啓事役を辞して野に下った市河寛齋は、吟詠に専念するため江湖詩社を結成した。天明七年(1787)のことである。盟主・寛齋のもとにあつまったのが、柏木如亭、大窪詩仏、菊池五山などの俊英たちである。(このとき、寛齋は三十九歳、如亭は二十五歳)。彼らがつぎつぎに詠じた新しい詩は、

「我江戸今日之詩、河寛齋唱之、柏如亭、窪詩仏、池五山和之。風流俊采皆一代之選也。因時人概稱之曰江戸四家。以媿南宋范・陸・楊・尤之四大家云。我が江戸の今日の詩は、河寛齋、これを唱え、柏如亭、窪詩仏、池五山、これに和す。風流俊采、皆な一代之選なり。因って時人、之を概稱して江戸四家と曰う。以て南宋の范(成大)・陸(游)・楊(万里)・尤(袤)の四大家に媿(匹敵)すと云う。」¹⁹

と評されたように、江戸の詩壇を風靡して、従前の詩風を一新する。元禄・享保以来の護園派の余風を一掃してしまうのである。

由来、荻生徂徠、服部南郭をはじめとする護園派は、明の李攀竜らの古文辞格調の主張に拠って、もっぱら擬唐詩をこしらえていたが、それは格套にこだわり、旧習になずんだものに墮していた。土台、唐の詩に倣えといわれても、天下泰平の世の中に辺塞詩を吟じ、佳麗三千人の後宮のないところで宮詞を詠じたところで、一片のリアリティーもともなわない。おりしも、作詩人口(あるいは読詩人口)が士から農工商の庶民にまで広がりつつあったところで、そういう実業層出身の詩人(あるいは読者)から、いかにも現実ばなれした擬古の詩は敬遠されはじめていた。

こうした弊風はあらためなければならぬ、と考えていた詩人は二三にとどまらなかったが、最初に詩風刷新の旗幟を鮮明にしたのは山本北山である。彼は天明三年(1783)刊の自著『作詩志彙』²⁰において、徂徠門流の詩を「唐詩ノ贗物」「剽襲模擬」であると筆鋒するどく批判した。北山の詩論のよってたつところは、ほかでもない、李攀竜を排した明の袁宏道の性霊説で、古人の剽窃をしりぞけて、清新の辞をもちいよ、性霊すなわち自己の真情から出た「誠ノ真詩」を作れ、と説いたのである。

この清新性霊の詩説は江戸の詩壇にむかえられたが、その実作は江湖詩社の詩人たちの手によってはじめられた。寛齋ら師弟は、写実的で平明な宋詩のスタイルによって、詩材を人事風俗の諸事に求めた。俗中に雅をさぐったわけである。

たとえば、彼らはしばしば飲食のことを詠じた。寛齋は霞ヶ浦の魚を贈られたときのよろこびを詠んだし(「所贈」、如亭は信州の蕎麦に対する賞賛をおしまなかつたし(「蕎麦歌」、詩仏は新鮮な牡蠣を堪能したという詩(「食蠣房」)を作ったが、とくに食通をもって任じた如亭は、さかんに食味を詠詩の俎上にのせた。その集大成とも言うべき著作が、口腹の快樂を謳った『詩本草』である²¹。

擬唐詩全盛のむかし、徂徠・南郭とは別に一家の見をたてた祇園南海は、

「宋朝ニ至リ、アラユル俗趣ヲエナリトシ、東坡ニ至リテ、又専ラ飲食ノコトノミヲ言フ、卑陋ノ中ニ尤卑陋ナルコト、可悪(ニクムベク)、可咲(ワラフベシ)」²²

と、きつく戒めたものだが、このように厳格な詩論をかえりみたととき、この詩風刷新における江湖詩社の功績は絶大であった。おおっぴらに口腹のよろこびを詠えることによって、江戸漢詩の地平が格段にひらけたからである。海の幸であれ、山の幸であれ、詩腸を鼓吹するものであれば、なにを詩に詠んでもかまわないのである。

くわえて盟主の市河寛齋は、陸游の研究家でもあり、その本伝年譜²³まで作っているほどだから、陸詩にはつねひごろ親昵していた。

その陸詩に、こういう詩句がある。

「村村皆画本、処処有詩材。 村々皆な画本、処々に詩材有り。」²⁴

画料詩材というのは、なにも名山大川にばかりあるのではない、平凡な農村や身のそこここにある、というのである。

さらに楊万里の詩句にも、こうある。

「閉門覓句非詩法、只是征行自有詩。 門を閉じて句を^{もと}覓むるは詩法に^{あら}非ず、只だ是れ^た征^こ行^ゆき^ゆきて
自^{おのずか}ら詩有り。」²⁵

家にばかり閉じこもって詩を作っているはいけない、門を出て遠く脚をのばしてこそ、詩はおのずと生まれるのだ、というのである。

こう言われればもう、漢詩人たるもの、ゴミゴミした市井小巷を飛びだして、郊外を散策したり、田園を逍遙したりするほかあるまい。詩料は在々所々に埋もれているというではないか。化政期の「郊行漢詩」の流行は、煎じつめていうと、陸・楊二家の「われとわが脚をもって吟行にはげめ」という実践がおもんじられた、その結果なのである。

こうして化政期の漢詩人たちは、まだ人の知らない美しい風景をもとめて、あるいは、まだ人が詠っていない新しい題材をさがして、ほうぼうを徘徊することになる。

「吟咏到××。 吟咏して××に到る。」

これは当時の漢詩集によく見られる常套句であった。

すでに「真情をうたえ」と説いた寛齋は、さらに踏みこんで、こうも言い切った。

「詩無不可作者、只在上下其格耳。 詩に作るべからざるもの無し、ただその格を上下するに在るのみ。」²⁶

かくいう寛齋じしんが、思い切った詩料の拡大をねらった。詩に作ってならならぬものはない——そう考えた寛齋は、いきおい遊里にも材を求めた。こういう大胆さは、元禄～明和期の儒学者主流の詩壇にあっては思いもよらぬことであった。

また話は前後するが、天明六年（[1786]と推定されている）に、寛齋は日本初の竹枝詞集である『北里歌』一冊を上木した。『吉原詞集成』の解題によれば、「寛齋作る所の北里歌三十首を彼の知友二十三家が書し、これに磯田湖竜齋の插画二十一面を配した詩画集」²⁷で、画期的な出版であった。これが門下にあたえた影響は無視できない。出版の十年後、弟子の大窪詩仏が、

「寛齋先生作北里歌三十首、以見性靈之詩莫不可言者、舒亭吉原詞、娛庵深川竹枝、皆是其所權輿也。而先生隱其名不著。寛齋先生、北里歌三十首を作り、以て性靈の詩、言うべからざるものなきを見はす、舒亭が吉原詞、娛庵が深川竹枝、皆な是れその權輿するところなり。而れども先生その名を隠して著はさず。」²⁸

と回想しているが、社中の詩人にとっては、師の『北里歌』三十首は先駆的な詩作であって、性靈詩の拡充をこころみる前衛的実験であった。後進に道をひらいて、「權輿」とあおがれたゆえんである。

しかし、それはきわどい実験であった。天明六年という、昌平覺啓事役を辞職する前年ことで、啓事役(学員長)という立場上、また江戸の儒林、文苑に重きをなした大家である手前、このような艶詩を実名でおおやけにするのがはばかられた。そこで「玄味居士」という、いかにも戲号然とした匿名にかくれて、この詩集を発表するほかなかったわけだが、こういう戯作者じみたペン・ネームのうしろにひそむ寛齋の韜晦の手口は、じつはそれほど単純なものではない。そうせざるをえなかった作者の機微については、揖斐高氏の綿密な論考があるので、いまは贅言をひかえるが、ここで注目したいのは、『北里歌』自序の、

「如云淫靡不節、風雅之罪人、余何辞其責哉、余何辞其責哉。もし淫靡不節にして、風雅の罪人と云うならば、余、何ぞ其の責を辞せんや、余、何ぞ其の責を辞せんや。」²⁹

という末尾である。最後の最後で、「余、何ぞ其の責を辞せんや」という反語を二度までくりかえしたのは、先駆者であることの矜持だろうか、それとも躊躇だろうか。これが明の即空観主人こと凌濛初^{りようもうしよ}だったら、淫靡にわたる小説を書いておきながら、「作意は勸戒にあるので、『風雅の罪人』ではない」³⁰と言いぬけただろう。中国では、よくある手である。しかし寛齋は、あくまでも稗官者流ではなかったし、また、このように見えすいた口実も使えなかった。

もちろん、こうした寛齋以後の竹枝詞(遊里詩)流行に対して、こころよく思っていない学者、文人はざらにいた。

「近年は竹枝詞おこなはれて、狭斜淫佚の状をほゞからず、輕薄をほこりて風流とするにいたれり。にがにがしく詩道を汚す風雅の罪人にぞありける」

これは津藩の儒官・津阪東陽の『夜航余話』³¹中の一文であるが、これは当時の竹枝詞作者に対する批判の典型であると見ていいだろう。東陽といえば、江戸詰めの一時期、寛齋、詩仏などと詩酒徴逐したこともあるのだが、そういう間柄にして、こういう酷評があるのである。じつのところ寛齋は「風雅の罪人」という責めに甘んじるどころか、内心それをおそれたのではないか。いくら真情を詠むにしても、色里の妓情を漢詩に詠むこと自体、当時としては沙汰のかぎりであったからである。戯号に韜晦したとはいえ、寛齋はそれをあえて表沙汰にした——さきに「きわどい前衛的実験」といったゆえんである。

しかし、この寛齋の驥尾に付して、弟子の柏木如亭が『吉原詞』を、菊池五山が『続吉原詞』『深川竹枝』を矢継ぎ早に発表した。思いのほか、これらの遊里詩は詩壇の耳目をあつめた。如亭の『吉原詞』にいたっては、すこぶる好評をもって迎えられた。

「余少時嘗墮在酒海肴山于北里之中、作吉原詞三十首。頗為同臭所賞。余、少時嘗て酒海肴山に北里の中に墮在し、吉原詞三十首を作る。頗る同臭の為に賞せらる。」³²

こうして禁忌はやぶられた。もはや、詩に作ってはならぬものなどはない。ある意味において、彼らの

遊里詩の発表は一種の自由詩運動だったと言っていい。

三

古来、「地は景によってすぐれ、景は人によってあらわる」と言われる。どんなに眺望絶佳の地形であっても、人によって発見されなければ空しい、ただの平山凡水にすぎまい。いや、ただ発見されただけではまだ意味をなさない。名人上手によって詩にもよまれ画にもかかれて、はじめて奇観妙景とされるのである。まず「人があって景がある」というわけだ。

わが金沢八景もそうであった。もともと、あの一帯は里人・浦人によって勝景であるとは意識されてはいたものの、唐土の瀟湘八景にならぶほどの名区勝概とは広く認識されていなかった。

ところが元禄のむかし、明の渡来僧・東皐心越とうこうしんえつ禅師が能見堂巡錫のおりに、本堂より打ちながめた風光明媚が現在の湖南省の瀟湘八景(あるいは杭州の西湖だともいう)に相近く相似ているとして、その八勝に準擬し、八詠の詩賦をなした。それが『能見堂八景詩』(一般に『金沢八景詩』と呼ばれる)八首の連作である³³。この『八景詩』成立以来、当地は水明山媚の盛名をはせるようになる。そのことについては本紀要の創刊号や第2号で言及したから、ここでは縷々のべないが、禅師の能見堂巡錫後百年以上経ってから、つまり化政期に入ったころから、ここは文人雅客行楽の地となったようである。

たとえば文化三年春、一時の詩豪・大窪詩仏は文友の山本緑陰、市河米庵、福田竹庵をともなって武州金沢八景に遊んだことがある。四人とも江戸で聞こえた錚々たる文人墨客である。そのおり詩仏が投宿先の東屋しじしろうぎに対して、「四時總宜のろう(総宜)之樓」という書をあたえた。以来、なにごとにも唐風の雅馴をもとめる人たちに、「総宜樓」(あるいは「総宜亭」と呼ばれるようになったことは、すでに本紀要第2号で述べた³⁴。しかし、当の東屋はというと、いまでいう民宿に毛がはえた程度の旅宿にすぎなかったが、サービス精神の旺盛な詩仏は、田舎宿の東屋に名前負けするほどの美称をたてまつったわけである。たとえ賤の屋であろうと、花中に行楽し、月下に眠ることができさえすれば、まんざらでもあるまい——詩仏はそう考えたかもしれない。

一見「四時總宜」とは、なんの曲もない言葉にみえるが、この四文字にも実ははれつきとした典故がある。詩仏は当地の風光を唐土の西湖と見立てて、南宋の周密撰『武林旧事』に見える、以下の文章によったのである³⁵。

「西湖天下景、朝昏晴雨、四序総宜。杭人亦無時而不遊、而春遊特盛焉。西湖は天下の景にして、朝昏晴雨、四序総て宜し。杭人(杭州人)も亦た時として遊ばざるはなく、而して春遊は特に盛なり。」

ここにいう「四序総宜」は「四時總宜」とほぼ同義で、「春夏秋冬すべてよい」(裏に四時行楽せよという意をふくむ)という意味である。詩仏が南宋の有名な文人である周密の言葉をまねた形であるが、しかし中国文学において、模倣は恥ずべき行為ではない。むしろ推奨されるべき引喩なのである。

現在、浙江省の省都である杭州は、十二世紀に、北方の女真人の金朝に中原を逐われ、長江以南の地を支配した南宋朝(1127~1279)の首府であった。あくまでも臨時の首都という意味で、当時は「臨安」と呼んだ。不思議なことに、天下の半分を金にうばわれるような屈辱に甘んじながらも、南渡以来、臨安はむしろ経済的に急速に発展した。人口も最盛期には百万を超え、世界最大の都市の一つとなって

いたのである。

「殷賑を極める商業、極度の人口集中、間断なく流入する旅人や商人の在留は、杭州の住人や多くの旅行者が食事をし、寄り集まり、楽しむ場所があった」³⁶

そういう享楽機関が湖畔に軒をつらね、また湖上で舩ふねばたを接しあっていた。前者の代表が遊里であり、後者の代表が画舫であって、夜がな夜っぴて脂粉の香りがただよい、糸竹管弦の音がさんざめいた。西湖では日々、遊興のために万銭が消費されたので、当時の杭州語では西湖を「銷金鍋児」と呼んだという。「金を銷とす鍋」——これは臨安の鄙言俚語であったが、詩語としてもつかわれた。ほとんどの場合、遊里という意味で使われる。

周密はこのような世界的都市・臨安の繁華のありさまを、『武林旧事』十巻という繁盛記として書きのこしたわけだが、詩仏はすでに本書を読んでいて、金沢八景の美景に西湖の面影をみる思いがしたのでろう。

「春夏秋冬すべてによろしい楼たかどのである」

詩仏は西湖を見たこともないのに屈託なくそう書いたが、時あたかも文化三年の春、春郊の客だった詩仏は、おもに「春遊は特に盛んなり」という杭州人の行楽のありさまを思いうかべて、扁額の六文字を揮毫しただろう。本紀要第2号の156頁に、その扁額の写真を掲載しておいたが、詩仏らしい達者な筆である。東屋はこれによって中国風の「総宜楼」という雅称をえて、文政年間に急速に発展しだし、天保のころには『江戸名所図会』において挿図で紹介されるほどの繁盛をきわめた³⁷。

この文化三年の数年後に、大窪詩仏はまた弟子の佐波淡齋らを同道して、金沢八景へ郊遊に出かけた。

「武州久良岐郡金沢の能見堂は、江戸より行程十三里……」³⁸

「武州久良岐郡能見堂擲筆山地蔵院曹洞は、程ヶ谷駅の南四里にあり、爰にいたる道路は中里の二軒茶屋といふあたりより、段々に山中に分入小坂を登り、蹊路を経て十余町にして、能見堂の土地にいたる、是より金沢の瀬戸橋へ二十余町ありなん」³⁹

このように金沢は江戸から比較的近く、無理をせず神奈川宿か保土ヶ谷宿で一泊すれば、徒歩でも難儀なくゆける。江戸からの郊遊には恰好の勝地であろう。品川を発つや、美しい田園の風景がひらけて、身にしみついた都塵もみるみる洗われていく。馬や駕籠にたよるなど、「郊行」においては論外である。こうして「塵囂じんごうの韁鎖きょうさ」⁴⁰から解放されたとたん、「自らの足による歩行の喜び」⁴¹が、われとわが脚をもって感じられたのである。

詩仏・淡齋の一行も、遊志勃勃、武州金沢さして東海道を徒歩で歩いていったにちがいない。もちろん、総宜楼こと東屋での設宴吟詠は予定に入っていただろう。なぜなら、自由狼藉、酒間に韻をたたかわすのは、当時の文人サークルのならいだったからである。かつて中国では、これを「文人雅士の飲宴賦詩」といった。